妹と仰候歟ッレ詞「さむ候　シテ「此とし月添申候に。今迄はかくとも仰られず候。なんほう心深き人にて渡り候。扨此御腰の物をばしかと見知申されて候か　ッレ「さん候こんねむどうと申す御こしの物にて候　シテ「實〻是ハ承及たる御腰の物にて候。さてハ鞍間に御座候ひし牛若殿よて候歟。時刻うつりて叫ふネト。急き追付申。此御腰の物を參らせ上うするよて候。れことも跡より渡り候へ。や。いまた是に御座候よ。いかに申上候。是に女の候が。此御こしの物を見知たる由申候間。先〻召上られうするにて候　牛上セ、ル「ふしぎやな行へも知らぬ田舍人の。我〻情の深きそや　ッレ「人違ならはおゆるしあれ。鞍間の少人牛若君と。見奉りて候也　牛「實今思ひ出したり。もし正清が所縁の者かけるか。さらば此御腰物をかへ志申さんと牛若に迫ひつき。この御刀を見知りたる女の候ふよし申しければ。牛若よろこびて互に名のり合ひしが。夜も明けゆくまゝに鏡の宿を立ちいで。吉次と伴ひ美濃の國赤阪の宿に至りて一宿す。此夜

盜賊共大勢攻め入りしを牛若一人に引き受けて殘さず切り伏せ。遂に其巨魁なる熊阪長範を討ちとめて吉次を助けたること。を作れり。長範時に六十三なりしといふ。

らいは鎌田が妹に。牛「阿古屋の前か」ツレ「さん候」牛「實知は理り我こそい身のある果の牛若丸。人甲斐もなき今の身を。語れは主從と。しらるゝ事ぞ悲しき」上同「早東雲も明行は。月も名殘の影うつる鏡の宿を立ち出る」ツレ二人上「痛はしの御事や。さしも名高き御身の。商人と伴ひて。旅を飾磨の歩はたし目も當られぬ御風情」牛上「時代に替る習ひとて。世の爲身をは捨衣恨と更に思はれず」ツレ二人下「東路の御餞別とおぼし召れ候へとて」上同「此御腰の物を。強て參らせ上げれは。力なしとて受取。我もしも代に出あらは。思ひ知べしさらはとて商人と伴ひうきなひに。やつれ果たるみの〳〵國赤坂の宿に着けり〳〵」牛詞「皆ゝい何事を仰候ぞ」ワキ詞「さん候我等この宿に着候を。此あたりの惡黨共聞付。夜討にうたう

©島薗平吉

ずる由申候程に。左樣の事を談合申候　牛「縱大勢有とても表に進む兵を。五拾騎ばかり切伏るならん。やはり引ぬ事は候まじ　若「是は頼もしき事を仰候物かな。悉皆頼申度候　牛「面〻は物具して待給へ。我ん追手の口に向ふへしと　上同「夕部も過て鞍間山。〳〵。年月習ひし兵法の術は今社は。顯はし衣の妻戸を。ひらきて沖津白浪のうちいるをおそしとまち居たり〳〵　シテ立唄「寄懸て。打白波の音高く。閧と作つて。さわきけり　シテ樂「いかに若武者共　若武者「御前に候　シテ「追手がくわつとなだれたるは。内の風ばしはやいか　若「さん候内のかせ早くして。或は討れ。または重手負たると申候　シテ「ふしきやなうちには吉次兄弟ならでは有まじきが。扨何者かある　若「さん候投松明の陰より見れは。十六七の小男の

小太刀を以て切て廻り候は。さゝから蝶鳥の如くなるよし申候　シテ「扨摺針太郎兄弟は　若「其は火振の親かたとして。一番に切て入しを。例の小男追取あひ。兄弟の者の細首を只一うちに打おとしたると申候　シテ「ゐい何と〳〵。彼者兄弟は。余の者五拾騎百騎にも増うずるが。あ〻斬たり〳〵。きやつは盜者かな　若「高瀬の四郎ん是を見て。今宵の夜討の物の樣。あしかりあんとや思ひけん。手勢七拾騎にて引て歸りたると申候　シテ「しやつい今にはじめぬ大臆病の奴よ。扨松明の占手い如何に　若「さん候一の松明は踏消。二の松明は切て落し。三はとつて投返して候が。三ッが三つながら消たると申候　シテ「其社大事よな。それ松明の占手といつい。一の松明は軍神。二のたいまつは時の運。三は我等が命成よ。三ッが

みつなから消なば。今宵の夜討は。扨よあ　若「御諚のごとく此分よては鬼神もたゝりつべうもなく候。唯引て御歸り候へ　「實〻盗も命の有てこそ。いささらは引て歸らう　若「唯御かへり候へ　「能〻物を案るに。さすが東海道よ隱れなき熊坂の長範ゞ。こよひの夜討を仕損じて。何處に面をむくべきぞ。唯責いれや若武者共と。大音聲よてよは〻りつ〻閧を作つて。切て入けり　上同「荒物もの。しや己等よ。〳〵。先に手並はしりつらん。其にも懲ず打入か。八幡も御知見あれ獨　上同りも助けてやらじ物をと小口にたつてゞ待かけたる「熊坂の長範六十三〳〵。今宵最後の夜討せんとて。鐵足駄ふんぬき拾五尺三寸の大太刀を、すらりとぬいて打かたけ。踊りあゆみにゆらり〳〵とあゆみ出たる有樣は。いか成天魔

鬼神も面を向べき樣ぞなき荒はか〳〵しや盗人よ。〳〵。めたり顔なる夜討はするとも我には叶いじ物をとて。透間あらさす斬てかゝる。熊坂も大たち遣ひの僻ものなれはさそくを踏で十方切。八方拂ひやこし車。はにふの返し風まくり。劔ふらしや獅子のはがみ。もみち重ね花がさね。三がしらより火を出して。しのきを削つて戰ひしが。秘術を盡す大太刀も御曹子の小太刀に打立られ請太刀にあつてゞ見へたりける　上ノル「打物わさにてかなふまじ。組でちからの勝負せんとて太刀投すて〻。大手をひろゆて飛でかゝるをそむけて諸膝薙給へは斬れてかつはと轉びけるが。つゝたつ所を眞甲よりも割付られて。獨りとみゆつる熊坂の長範も二つに成てゞ失にける

○夜討曾我

建久四年五月右大將頼朝富士の裾野に狩す。時に曾我十郎祐成。弟の五郎時致は。十餘年が間忘るゝひまなかりし父河津三郎が讎。工藤祐經をけふの狩に事よせて討たんとはかる。さる程に兄弟は互

夜討曾我

次第ツヨク十郎「其名も高き富士の根の。〳〵。御獵にいさや出うよ

十郎詞「是は曾我の十郎祐成にて候。偖も我君東八ヶ國の諸侍をあつめ。富士の牧獵をさせられ候間。我等兄弟も人なみに罷出。唯今ふしの裾野へと急候

レ同「けふ出ていつ歸るべき故郷と。思へは猶もいとゝしく

進行「名殘を殘す我宿の。〳〵垣根の雪は卯の花の咲ちる風の行へぞと。我あしがら遠かりし。富士の裾野に着にけり〳〵

十郎詞「急候程に。是はは

シテ詞「御前に候

十郎「然や富士の裾野に着て候。いかゝ時致

シテ「畏て候

十郎「いかゝ時致。今るへき所に幕を御打せ候へ

ゝ始めぬ御事なれ共。我君の其威光の目出度さゝ候。うち並

○夜討曾我

に心をさだめつゝ。さるにても故郷の母上にかくさも申さず參りたれば。後ゝて御おげきあるべき事それのみ心にかゝるふり。されば鬼王團三郎の兄弟に形見をもたせ。故郷へかへすべしとて。各懷紙をとり出だす。兄弟は夜更くるまで文を

へたる幕のうち。目を驚かしたる有樣にて候。加程多き人の中に。我ら兄弟が幕のうち程物淋ゝき事ゝ候ましし

シテ「さん候我等が幕のうちはと物寂たるゝ有まじく候。扨彼あらましい候

十郎「荒增とは何事にて候そ

シテ「あら御情なや。我らは片時も忘るゝ事はなく候。彼祐經が事は候

十郎「實々某も忘るゝ事はなく候。扨いつまでながらへ候べき。兎もかくも然るべき樣に御定め候へ

シテ「仰のとくいつを何時までながらへ候べき。今夜ようちかけに彼者を討うするにて候

十郎「更は其に御定め候へ。いたと思ひ出したる事の候。我等故郷を出し時。母にかく共申さず候ほとに。御歎有べき事。是のゝ心に懸り候間。鬼王か團三郎か。兄弟に一人筐の物を持せ。故郷へ歸さうずるにて候

シテ「仰は去事に

書く。十郎が文。五郎も某も五つや三つの年よりも孤となりて。母御前一人を頼み奉りて。年月を送りし事の悲しき。佛神に祈り申して敵祐經に逢はせて給へと祈念申しゝ。ふるしにや。今夜本意を遂げんずる事のうれしき由。また膚の守を母上

て候へども。一人歸れと申候はゝ。定てとかく申候べし。唯二人共に御返しあれかしと存候　十郎「さらば二人とも此方へ召候へ　團三郎「畏て候　「畏て候。いかゝ團三郎。鬼王御前へ參り候へ　十郎「いかに團三郎。鬼王も慥にきけ。汝兄弟に申べき事を承引すべきか。又承引すまじき歟先直に申候へ　團三郎「是は今めかしき御諚にて候。何事にても候へ御意を背く事は有まじく候　十郎「荒嬉しやさては語つて聞せ候べし。偖も我等が親の歓の事。かの祐經を今夜ようちかきに討べき也。兄弟むなしく成ならば。故郷の母歎き賜はん事。餘りに痛はしく候程に。筐の品々を持て。二人ながら故郷へ歸り候へ　團「是は思日も寄ぬ御諚にて候物歟。御意も御意に社より候へ。此季月奉公申候

へ。著顯れし小袖を乳母ある讃岐の局へ。髮の髮一くゝりを二宮の姉宮へまゐらする由を細々と認めて。追て書に。七年の間毎日六万遍の念佛は。母御前の後世菩提に遺らする。これを以て逆修の善根として一佛淨土の緣成らせ給へとぞ書き

も。此後大事は眞先駈て討死仕るべき爲まして社候へ。何と御諚候共。此儀に於ては罷歸るまじく候。鬼王左樣にてはなきか　鬼王「中々の事罷歸る事は有まじく候　十郎「汝等は不思儀なる事を申物哉。扨おそ以前に言葉を固めて申候に。ふつゝと罷歸るまじきか　團「ふつゝと罷歸るまじく候　十郎「なふ五と歸るまじきか　團「畏て候。やあ汝等は何とて歸郎殿あれを御歸し候へ　「畏て候。るまゝきとは申ぞ。左樣に申さうすると思し召て社。始より詞を堅めて仰候に。扨はしかと歸るまじきか　鬼「先畏つたると御申候へ　團「かしこまつて候　「しかと歸らうするなら罷歸らうずるにて候　團「兄弟の者罷歸らうずると申候　團「いかに鬼王。さて何と仕候べき。罷歸れば本意に非す。又歸らねば御意を背く。兎角進退爰に極つて候　鬼「仰の

たりける。五郎が文には。生年三つの時孤となり。母御前一人を頼み奉り過ぎ行き玄心の内。たとへやるべき方もなし。十一年より箱根へ登り。ひさゝせ鎌倉殿二所詣での候ひし時。獻祐經と一目見しより以來。片時も父の御事忘れやらず。本意を

○夜討曾我

ごとく罷歸れば本意に非ず。又歸らねば御意を背く。我等も是非を辨ぜず候。但急と案ぜ出したる事の候。何處にても命を捨るこそ肝要なれ。おほそれなから團三郎殿と是よて指違へ候へし

團「實々何處にても命を捨る社肝要かれ。いささらは指違えう

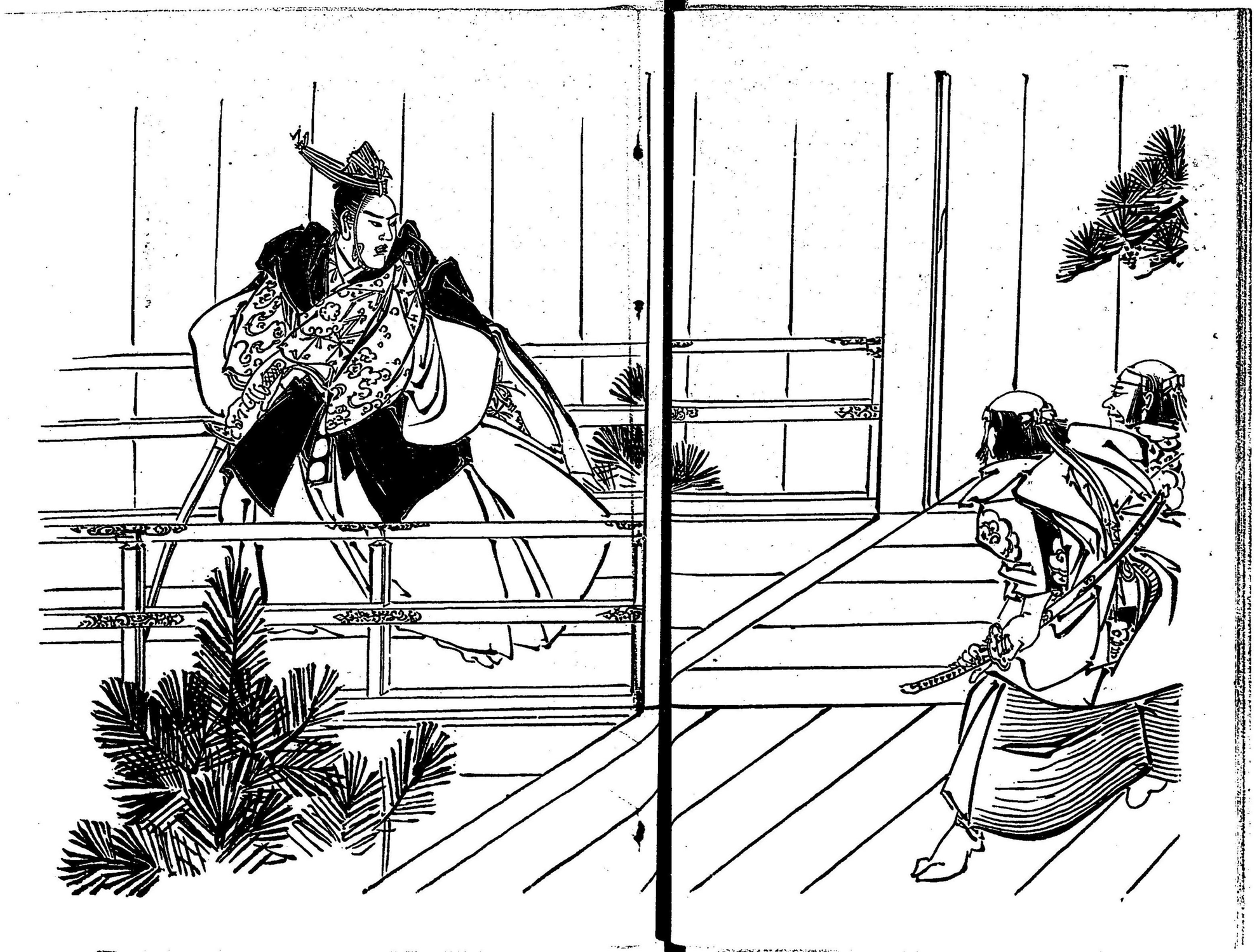
鬼「尤にて候

「あゝ暫。是は何事を仕るぞ

十郎「やあ兄弟の者歸す。まおきそ〳〵。先心を靜めて聞候へ。今夜此所にて祐經を討。兄弟空しく成ならば。故郷の母は誰かかくと申へきぞ。敬ふ者に隨ふは。君臣の禮と申也。是を聞ずは生々世々。永き世迄の勘當と地かきくときの給へは。鬼王團三郎。さらは筐をたまはらんと云聲の下よりも。不覺の涙せきあへす

地「夫人の筐を贈りし例には。彼唐土の樊噲か。母の衣を着替しは。永き世迄の例なり

十郎「今當代の弓



逢げんため男に成り候所。御不審を蒙り候ひし。鎌倉殿御狩廻りと承り。信濃の國淺間嶽の麓。離山の腰。上野下野に至るまで。十郎殿と打連れ奉り。狙ひ候へども叶はず。又富士の御狩と承り打出候ひしに。御勘當を免さしめて罷出候事こそ後世

取の。幌とは之を名付たり　下同　然れば我等が賤しき身を喩ふべきにはあらぬども。恩愛の契りの哀さは。我等を濟てぬ。習ひ也去程に兄弟。文こまゝとかき收め。是に祐成が今の時にかくふみの。文字消て薄くとも。筐に御覽候へ。皆人の筐には手跡に增る物あらじ。水莖の跡をい心に懸て問給へ。老生不定と聞時は。若き命も賴まれず老たる世の ならひ。飛花落葉のことわりと思召れよ。そのとき時致も。肌の守りと取出し。是はときむねが筐に御覽候へ。筐は人のあき跡の。思ひの種と申せども。責て慰むならひあれば。時致は母上にそひ申たこと思し召せ。今迄は其ぬしを。守り佛の觀世音。此世の緣なくと來世をば助け給へや　十郎シテ上「既に此日も入相の。鐘もはや聲々に諸行無常と告渡る。さらばよいそ

までも有かたくこそ覺え候へ。など同じやうに書き認めて。是も母上を始め人々へ髮の髮馬鞍など おくりまゐらする由を記して之を二人の從者へ渡し。汝は是より故郷へ歸るべき由を命じたるに。二人は涙をおさへつゝ。たとひ力およばず き急き使。涙を文に卷こめて其まゝやる。文のひぬ間にと。詠せし人の心まで。今更思ひ白雲の。かゝるや富士の裙野より。曾我にかへれは兄弟すこ〳〵と跡を見送りて。泣てとゝまる哀さよ〳〵 後シテ詞「荒駿しの軍兵やな。我等兄弟討んとて。多く騒きけり 一セイ ソヨク「寄懸て。打白波のおと高く。鬨と作つて。の勢い騒ぎあひ。爰を先途と見えたるそや。十郎殿〳〵。何迚御返事はなきそ十郎殿。宵に新田の四郎と戰ひ給ひしか。扨いゝや討れ給ひしよあ。口惜や死は一所と社思ひしに。物思ふ春の花盛。散〳〵になつて爰やかしこに。屍を晒む無念さよ 上詞 味かたの勢ゝ是をみて。〳〵。打物の鍔元くつろげ時致を目懸てかゝりけり 上シテ「荒はか〳〵しやれのれらよ。〳〵。先に手並は知らん物をと太刀取直し。立たるけしき

とも一所に御供致して討死仕るこそ本に候へ。御供かなはずは御前にて腹切て冥途への御供仕るべしと。片肌脱ぎて腰の刀を抜く。十郎も諸共に五郎も諸共に走りより刀をうばひとりて。目と目を見合せ泣くより外に言葉もなし。やゝありて十ぬ人おろなかりけれ。かゝりける所に。〳〵。御内方の古屋五郎。樊噲が怒りをなし張良が秘術を盡しつゝ。五郎が面に切てかゝる。時致も古屋五郎が拔たる太刀のしのぎを削り。しばしがほどは戰ひしか。何とか切けん古屋五郎は二ッゝ成てぞ見へたりける。かゝりける所に〳〵 御所の五郎丸御前に入たて叶ゝど物とと肌には鎧の袖をとき。草摺かろけにざつくと投かけ上には薄衣引かづき唐戸の脇にて待懸たる シテ下「今は時致も運つき弓の。〳〵力もおちて。誠の女ぞと由斷して通るを。遣過し押ならべ むんずと組は 上「おのれは何者ぞ 詞 御所の五郎丸荒物〳〵おとわだ髮抓むてゐいやゝと組轉んで。時致上ゝ成ける所を下よりえいやと又押返し。其時大勢おり重つて。千筋の繩をかけまくも。かたじけな

耶は涙をぬぐひ。汝等を故郷へ歸す事深き思ひのあればなりと。すかしつ慰めつして論しければ。二人も理に伏して遂に主を捨ておき。名殘としげに故郷をさして出で行きぬ。さて其夜曾我兄弟は。鞘經が寐たる所に踏み入り。遂に本意をとげて年來の鬱憤を晴したり。時に五月廿八日の夜十耶は新田四郎忠常が手にかゝりて。即座に死し。第五郎は同廿九日午の刻に。筑紫忠太が手にかゝりて死す。兄弟が有樣つたへきくもの袖をぬらさぬはなかりしさぞ。

○猩々　周の國の傍羊唾といふ處に禹風といへる人あり。市を立てゝ酒を賣りしが正直にして常人の如く利潤を取らず。

くも君の御前に。引立行とそめでたけれ

猩〻

詞「是は唐士かねきん山の麓。楊子の里にかうふうと申民にて候。偖も我親に孝有により。或夜ふしきの夢を見る。楊子の市ゝ出て酒を賣ならは。富貴の身となるへしと。教のまゝになすわさの

上カール「時去とき來りけるにや。次第〳〵に富貴の身と成て候。詞又爰にふしきなるこの候。市毎ゝ來り酒を呑者の候か。盃の數は重れとも面色は更に變らす候程に。餘されば買ふ人數多ある中に。面色赤く髪は蒲棘の如き異形のもの夜々かならず飲みに來る。禹風問ひて曰く。汝は何くのものぞ。答へて曰く。今は何をか包まん。海中に住む猩々といへるものなり。明夜潯陽江の邊に來りて我を待ち給はは。其時

りに不審に存し。名を尋て候へは。海中に住猩〻とかや申候程ゝ。今日は潯陽の江に出て。彼猩〻をまたはやと存候

上「潯陽の江のほとりにて。〳〵。菊をたゝえて夜もすがら。月の前にも友まつや。又かたふくる盃の。影をたゝへて待居たり〳〵

「老せぬや。〳〵。藥の名をも菊の水。盃もうかひ出て友にあふろ嬉しき此友に逢そうれしき

上同「みきときく〳〵。名も理りや秋風の

「ふけとも〳〵

上同「更ゝ身にはさむからし

下同「理りや白菊の

「ことわりやしらきくの。きせわたを温めて酒をいさや酌ふよ

上同「月星は隈もなし

「所は潯陽の

上同「蘆の葉の御覽すらん

「猩々まいをまはふよ

「江の中のさか盛

「聲すみ渡るうら風笛をふき。浪のつゝみとうとうち

○狸〻

の　上同「秋の調や。殘るらむ　下シテ「有難や御身こゝろすなはなるにより。此壺に泉をたゝえ。只今かへし。あたふるありよもつきし　下同「よもつきし。よろつ代までの竹の葉の酒。くめともつきす。呑ともかはらぬ秋の夜のさかつき。かけもかたふく入江に枯たつあしもとはよろ〳〵と。醉に臥たる枕の夢。を結ふと思へばいつみはろのまゝ。盡せぬ宿こそ。めてたけれ

姿を顧はすへしとて去りぬ。いはれし如く其處に至りて見れば。彼者大きゐる壺を抱き波間近く來りて之を濱邊に据ゑおき。歌ひ舞ひつゝ酒を飲む。かくて此壺に篠を添へて禹風に與へたり。家に歸りて見れば清き酒なみ〳〵と溢へぬたり。よりて篠の葉を門に立て此酒を賣れども〳〵盡くる事なく。之を飲むもの齢を延べ病を癒すこと限ふし。禹風たのしみ榮え羊唾の市にぎはひたりといふ物語を本にして作れり。諸に此禹風を孝風と玄羊唾を椀子と作りかへし事は他に據どころあるにや又作者の趣向にや詳ならず。狸々は本草綱目に。狀狗および猩猩の如く黄毛は猩の如く白耳は豕の如し。人面人足長髮頭顔端正にして聲兒の啼く如く亦犬の吠ゆる如く群を成す。俚人酒および草履を以て道ゝ側に置けば。狸々見て即ち人の祖先姓名を呼

ひ之を罵りて去る。しばらくして復た相與に酒を飲め履を著く。因て捲へらるゝなき見ゆ。

○熊坂

熊坂長範もとは熊坂太郎とて加賀の國の者ゝり。涙々の身となりて後盜賊の巨魁と仰がれ。承安年中美濃の國赤坂の宿に三條吉次を襲ひて。牛若の爲めに殺さる。其夜の景況は既に烏

熊坂

次第「憂しとはいひて捨る身の〳〵行へいつとか定むらん

ワキ詞「是は都方より出たる僧にて候。我未東國をみす候程に。只今思ひ立東國修行と心ざし候

道行「山越て遠江路なれや水海の。〳〵。粟津の森も見ゝ渡る勢田の長橋うち過て。野路篠原に夜とゝめて。朝たつ道の露深き。名社青野が原なから。色付いろか赤坂の。里も暮行日影かな〳〵

ワキ詞「此方の事にて候歟何事にて候そ

シテ「けふは去もの〻名日にて候。吊ひて給はり候へ

ワキ「其社出家の望なれ。扨誰と心ざゝて回向申へき

朝于折に詳にしたれば此に略す。長範七歳の時父と共にある福僧の許に行きしに。折しも土用ぼしの最中なりしかば。人しれず藏の鍵をぬすみて歸らんとす。住持見つけ追かけて之を取りかへす時。長範鍵を持ちふがらころびて。しめりたる

「縱其名は申さずとも。あれに見たる一木の松の。すこし此方の茅原こそ。只今申し者の古墳なれ。わうぶくならねば申也」

「あら何ともなや。誰と名をしらで回向は如何ならん」

「よし其迚も苦しからす。法界衆生平等利益」

「生死を」

「はなれよとの御吊を身にうけは。〳〵。たとひ其名はなのらすとも。受よろこん〳〵。それより主よ有難や。回向は草木國土迄。もらさしなれいわきて其。主よと心あくなく共。扨こそ回向なれうかまてはいか〳〵有へき」

「愚僧か庵室の候に。一夜を明して御通り候へ」

「さらはかう參らふするにて候。いかに申へき事の候。持佛堂よ參りつとめをはしめうつると存候處に。安置し給ふへき繪像木像のかたちもなく。一壁には大長刀。しゆじようにあらさる金の棒。其

土に鍵をかし入れ。形をつけおきて後に其形にあはせて相鍵をこしらへ。寺の庫に入つて財寶を盜みたり。それより途に進みて追剝强盜などするに至りしなりといふ。此話に作る青野が原に京部よりゆく時は右の方に小松あり。其中に高さ

外兵具をひつしと立おかれて候は。何と申たる事よて候そ」

「さん候此僧は未初發心の者にて候が。御覽候てく此あたりは。垂井逢墓赤坂とて。其里々は多けれ共。青野が原の草たかく。逢墓こやすの森しげれは。晝ともいはず雨の中には。山賊夜盜のぬす人ら。高荷を落し里かよひの。下女やはしたに至る迄。うち剝とられ泣さけぶ。其聲み〳〵に隙をなし。左樣の時は此僧も。例の長刀おつ取て。爰をは愚僧に任せよと。呼はりかくれは實は又一度はさもなき時もあり。左樣の時は此所の便にも成者ぞかしと。悅ひあへは然るへしと。思ふ斗の一念也。なんほう淺ましき世を捨者の所存候。師匠なき手から

「似あはぬ僧の腕たてさこそをかしと思すらん。去なから佛もみたの利劍や藍染は方便の弓に矢とはけ。多門は

十間ばかりの松一本立てり。之を長範が物見の松といへりなどいふ事古書に見ゆ。此松に登りて東西四五里が程を見すまし。人馬の足のはこびを見て。荷物それ〳〵の様体をさとり。手下の者にいひつけて其物を奪ひとらしめたりとなり。

鋒を横たへて。悪魔を降伏しさいなんをはらひ給へり　上シテ

「されは愛若慈悲心は　同「たつたか五逆に勝れ。方便の殺生は菩薩の。六度よゆよされりとか。是を見彼をき〳〵他を是非〳〵らぬ身の行へ。迷ふも悟るも心ぞや。されば心の師とはなり。こゝろを師とせされと古き言葉にしられたり。加様の物語。申さば夜も明なましお休みあれや御僧達我もまとろまんさらいと眠臓に。入よと見えつるか。かたちもうせて庵室も草村と成て松陰に夜を明したる不思議さよ〳〵　ツキ上「一夜ふすをしかのそ〳〵東の間も。〳〵。ねられむ物か秋かせの。松のした臥夜もすから。聲佛事をやなしぬらむ〳〵　後シテ上「東南に風たつて西北に雲しづかならす。夕闇の。夜かせはけしき山陰に　上地「梢木の間や。さわぐ覽　「有明頃かいつしか

に　上同「月は出てる朧夜なるべし切いれ攻よと前後を下知し。弓手やめてに心をくはつて。人のたからをうばひし惡逆。娑婆の執心これ御覽せよ。淺ましや　詞「偖は熊坂の長範にてましますか。其時の有樣御物語候へ　上「扨も三條の吉次信高とて。毎年數多の寶を聚て。高荷を作つてれくへ下る　詞「天晴是をとらはやと。たゞふ與力の人數は誰〻ぞ　上「偖國〻より集りし。中にとりても江州には　詞「近江の國には河内のかくせう。摺針太郎兄弟は。日本一の剛の者。おもてうらには並びなし　詞「扨又都の其中よ。多きなかにも　上「火とゞもしたが有しそ　詞「三條の衛門壬生の小猿の上手わけ沈りには　詞「是等にうへはよゞくさし　上「偖北國には越前の　詞「阿取波の松若三國の九郎

「加賀の國には熊坂の　シテ詞「此長範を始として。究竟の手柄のしれ者ら。七拾人は與力して　ワキセル「吉次が通る道すがら。野にも山にも宿泊に。目付をつけて是を見す　シテ詞「此赤坂の宿ゝ着。爰こそ究竟の所なれ。引場も四方に道おほし。みれゝ宵より遊君すへ。數百のあそび時をうつす　ワキセル「夜も更行バ吉次兄弟。前後もあらす臥たりしよ　シテ中「十六七の小男の。目のうち人に勝れたるか。障子の透間ものあひの。そよともするをこゝろにかけて　ワキ上セル「すこしもふさで有けるを　シテ詞「牛若殿とは夢にも知らす　ワキセル「運のつきぬる盗人等　シテ「きけんゝ能ぞ　ワキ「はや　シテ「いれと　上同「いふこそ程も久しけれ。〳〵。皆我さきにと松明を。投こみ〳〵。亂れ入。勢ひはやうやく神も。面をむくべき樣そなき。然れとも午

若子少しも恐るゝ氣色なく。小太刀をぬいてわたりあひ。しゝふしん虎亂入。飛鳥のかけりの手をくだき。責戰へは堪えす。表よすゝむ拾三人。同し枕に切伏られ。其外手負太刀をすて具足をうはゝれはう〳〵逃て。命ばかりをのかるもあり。くまさかいう樣。此者どもを手のしたに。打ゝ如何さま鬼神か人間にていよもあらし。盗も命のありてこそあら笑止や引んとて。長刀杖につきうしろねたくも引けるか　シテ下「熊坂思ふやう。〳〵。物々し其冠者か。切というとも嘸ある覽。くまさか秘術を振ふならいいかなる天魔鬼神なりとも。中に抓て微塵になし。討れたる者とものいでけうやうにほうせんとて。道より取て返し例の長刀引ろはめ。打妻戸を小楯にとつて。彼小男をねらひけり。牛若子は御覽して。太刀拔そは

め物間を。少し隔て待給ふ。熊坂も長刀かまへ。互にかゝるを
まちけるが。いらつて熊坂左足をふみ鐵壁も通れと突長刀
を。ばつしとうつて弓手へこせは。おつ駈すかさすこむ長刀
に。ひらりとのれい。はむきになし。おさつてひけはめてへこ
すを。追取直してちようときれは。中にて結ぶをほどく手に。
かへつて拂へは飛あかつて。そのまゝ見えすかさちも失て。
こゝやらしこと尋る所に思ひもよらぬうしろより。具足の
すきまをちようときれは。こはいかまあのくハしやに。さら
るゝ事の腹立さよと。いへとも天命の。運のきはめぞ無念な
る　上同「打物」さにてかなふまし。〳〵。手取にせんとて長刀
なけ捨大手をひろけてこゝの眠廊。かしこのつまりに追駈
おつゝめとらんとすれとも蜻蛉いなつま水の月かや姿は見れ

○小鍛冶
一條天皇の御時。京都に三條の小鍛冶宗近といふものあり。帝御靈夢の御事ありしにより。俄に御劍

とも手にとられす
きこゝろちからもよわり。弱り行て　「此松が根の
苔の露霜と。消しむかしの物かたり。末の世たすけたひ給へ
と。夕つけも告渡る。夜もしらしらとあかさかの松陰にか
くれけり松かけこそは隱れけれ

小鍛冶

大臣詞「是は一條の院に仕へ奉る。橘道成とは我事也。偖も帝今
夜奇特の御靈夢まし〳〵て。三條の小鍛冶宗近に。御劍をう
たせらるへきとの宣旨唯今成下りて候程に。此由を宗近に
申付はやと存候。いかに此うちに宗近が有歟　「誰にて
渡り候そ　大臣「是は宣旨にて候。我君今夜ふしぎの御靈夢ま

を打ちて奉るべきよしの敕諚を受く。一大事のことなれば神力を頼む外なしとて。氏神の稲荷の社に參詣せんとせしに。途中にて人あり。宗近を呼びとめて曰く。先々御劍を打つべき壇を設け。我を頼みて待ち給はと。必ず參會して力を添へ申

し〳〵て。御劍を打せらるべきとの御事也。とう〳〵仕り候へ

「宣旨畏て承り候。折ふし相槌うつべき者のなく候をは。何と仕り候へき

大臣「ふしぎの事を申物かな。其名を得たる汝なるが。相槌打べき者のなきとは。心得かたき云事かな

「是は仰にて候へども加樣の一大事の物を仕るには。我に劣らぬ程のもの〳〵相槌仕りて社。御劍も打申べけれ。兎角に御返事と申兼。赤面したるばかり也

大臣「申所は去事なれ共。帝も寄特の御靈夢ましませい。たのもしく思ひつ〳〵。はや〳〵領掌申へしと。重て宣旨有けれは

「此うへは兎にも角にも宗近が。〳〵。身躰爰に極りて。御劍の刄のみたる〳〵心成けり。去あから御政道。直なる今の御代なれは。もしも奇特の有やせむろれのみ頼む心かな〳〵

「言語道斷。

さんといひすてたるまゝ姿は失せぬ。これぞ顯ち稲荷の御告ならんとて家に歸り。壇を清め心を凝らして祈請せしに。稲荷の明神は童男の姿と現はれ。槌を合せて御劍を打ち終り。爰に小鍛冶宗近と銘し。裏には小狐と銘して。之を敕使に捧げ。

一大事を仰出されて候物かな。加樣の御事い神力をたのみ申ならては別儀なく候。某が氏の神は稲荷の明神なれは。是より直に稲荷に參り。此事を祈誓申さはやと存候

「なふ〳〵あれあるは三條の小鍛冶宗近にて渡り候か

「不思議やなへてならさる御事の。我名をさして宣ふは。いか成人にてましますぞ

「雲の上なる君よりも。劍をうちて參らせよと。汝に仰有しよなふ

「されは社夫よ付ても猶くふしきの御事かな。劍の勅も唯今なるを。早くもとろし召る〳〵事。りへすも不審なり

「實々それは去事なれとも。我のみしれは諸人も

上詞「天に聲あり

「地にひく壁に耳岩の物いふ世中に。〳〵。隱れはあらじ殊よ猶。雲の上人の御劍の。光りは何かくらからん。唯たのめ此君の。惠

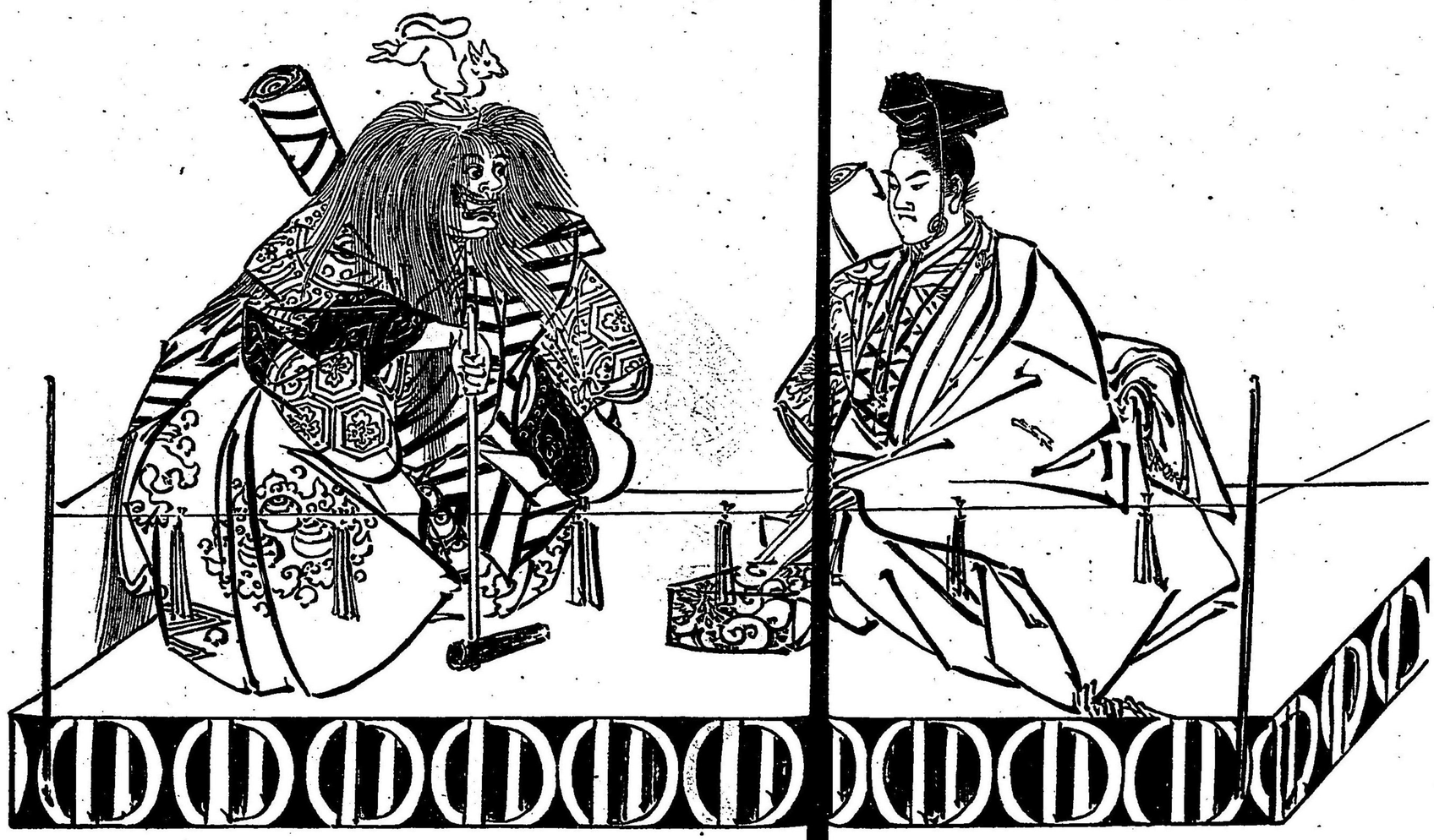
神体は雲に飛び乗つて歸り給ふことを作れり。之に引きだる日本武尊は。景行天皇の皇子として東夷征伐の敕を奉じ。駿河の國までをはしける時。國の造は尊を欺きて獵を勧め。獵場の小野の四方をかこみて。枯草に火をかけ焼討して奉りけ

にならはみつるきもなとか心に叶はさるなどかはかなはさるへき

「夫漢王三尺のけいの劔。ゐながら四夷の亂れを靜め。又煬帝ゲけいのつるぎ。しうしつのひかりをうはへりシテサシ「其後玄宗皇帝の鐘馗大臣も。劔の德に魂魄は。君邊ま仕へ奉り。魍魎鬼神にいたるまて。劔の刀の光りに恐れて其冠となす事をえす

「漢家本朝に於てつるきの威德申に及はぬ。奇特とかや又我朝の其始。仁王十二代。景行天皇。詔の御名をは日本武と申しが。東夷を。退治の勅をうけ。關のひかしもはるゝなる。東の旅の道すから。伊勢や尾張のうみすらにたつ波までも。歸る事よとうらやみいつか我らも歸る涙の衣手にあらましと思ひつゝけて行はとに

上ノ「爰やかしこの戰ひに。人馬うむくつに身を碎き。血は涿鹿の川と成て。



れば。尊は御伯母僕媛命より賜はりたる蒜雲の劍を抜きてあたりの草を薙ぎはらひ。向火つけて遂に賊を燒き滅ぼし給ひぬ。是れ劍に取りて目出度き古事なれば之をクセに作りしおり

紅波楯流し數度に及べる夷も甲を脱で戈をふせ。皆降參を申けり。尊の御宇より御狩場を進め給へり。比は神無月。廿日あまりの事なれは。四方の紅葉も冬枯の遠山に見ゆる初雪を。詠めさせ給ひしに

上シテ「夷四方をかこみつゝ。枯野〳〵草に火をかけ。餘煙しきりよもえ來り。敵せめつゞみを打かけて。火焔を放ちてかゝりけれ

下シテ「尊つるぎと拔て。〳〵。あたりを拂ひ忽ちに炎もたち退けと。四方の草を薙はらへい。つるぎの精靈あらしと成て。焔も草もふきかへされて。天まかゝやき地にみち〳〵て。猛火い却て敵をやけい。數万騎のえびすとものはたちまち爰にて失てけり。其後四海治りて人家戸ざしを忌れしも。其草薙の故とかや。唯今汝かうつへき其瑞相の御劔も。いかで夫には劣るべき。つたふる家の宗

○小鍛冶

近よ。心易くも思ひて下向し給へ　ワキ詞「漢家本朝に於てつるぎの威徳。時にとつての祝言申計なく候。偖〻御身はいか成人そ　シテ詞「よし誰とても頼むべし。先〻勅の御劍を。打へき壇をかさりつゝ。其時我を待給はゝ　同「通力の身と變じ。〳〵て。かならず其時節に參り會て御ちからを。付申へし待給へと。夕雲の稲荷山。行へもしらす失にけり〳〵　ワキ上「宗近勅に隨つて。則壇に上り。不淨をへたつる七重の注連。四方に本尊を掛奉り。幣帛を捧。仰ぎ願はくは。人皇六十六代。一條の院の御宇に。其職の譽れを蒙る事。これ私の力に非ず。伊弉諾いさなみの尊。天のうきはしを踏渡り。豐あしはらをさくり給ひし御鉾より はしまれり。其後なんせむそうかたこへはつし。みた尊者より此來。あまくにふしとの子孫に傳へて今に至れり。ねがはくは。〳〵宗近私の高名にあらす。普天卒土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神。唯今の宗近に力を合せてたひ給へとて。幣帛をさゝげつゝ。天に仰き頭をかたふけ。骨髄の膽情きゝいれ納受せしめ給へや　ワキ下「謹上再拜　同上「いかにや宗近勅のつるぎ。〳〵打べき時節は虚空にしれり賴めやたのめ。只たのめ　下シテ「童男壇の上にあかり。〳〵て。むねちかに參拜の膝をくつし。さて御劍のかねはと問は。宗近も恐悦のこゝろと先としてかね取出し。教の槌をはつたとうてはシテ「丁とうつ上同てう〳〵と打重ねたる槌のひゝき天地に聞えておひたゝしや　ワキ詞「かくて御劍を打奉り。面に小鍛冶むねちかと打　シテ詞「神躰時の弟子なれは。小狐とうらにあざやかに　上同「打終て申すみつるぎの。刀

○盛久
主馬八郎左衛門尉盛久は主馬入道盛國が末子にて平家譜代の侍たり。小松内府重盛熊野參詣の時。

は雲を乱したれば。天の村雲とも是なれや　「天下第一の。〳〵二ツ銘の御劔にて。四海を治め給へば五穀成就も此時なれや。すなはち汝が氏の神。稲荷の明神小狐丸を。勅使に捧げ申。是迄なりといひ捨て。又むら雲に飛のりまた村雲にとひ乘てひかし山いなりのみねにゝ歸りける。

盛久

ツキ詞「是は鎌倉殿の御内に。土屋の何某にて候。扨も主馬の判官もり久は。丹後國成相寺まで忍んで御座候を。能案内者をもつて生捕申。只今關東へ御供仕り候　シテ詞「如何に土屋殿。清水の方へ輿を立て給はり候へ　ツキ「其社安き御事。いかに面〻東山の方へ輿をたてられ候へ　シテサシ「南無や大慈大悲の

○盛久

供の中にありて今様をうたひ舞をまひたる事もありしが。平家亡びて後。京都にいくれぬて年來の宿願を果さんため。等身の千手觀音を造立し。清水寺本堂の傍に安置して千日の參詣とふせり。此事いつとなく世に漏れしかば。頼朝北條時政

觀世音さしも草。さしも畏き誓ひの末。一稱一念猶たのみあり。ましてや多年値遇の御結縁むなしからむや。荒御名殘をしやいつかさて。清水寺のはなさかり　地「歸る春おき。名殘かな　シテ「音に立ぬも音羽山　地「瀧津こゝろを。人しらし　サシ「見渡せは柳櫻をこき交て。錦とみゆる故郷の空。またいつかはと思ひ出て。限りあるへき東路に。思ひたつ社ゝなしけれ　シテ上「我おもしいに弓馬の家に生れ。世上に隱れなき身とて。思はさる外の旅行の道。せきの東に趣けは跡白河を行涙のいつ歸るへき。旅ならん爰は誰をか松さかや四の宮かはらよつのつし是やこのゆくも歸るも別れては。〳〵。知もしらぬも。あふ坂のせきもりも今の我をはよもとめし。勢田の長橋うち渡り。立よる影は鏡山。さのみ年へぬ身なれ

に命じて之を捜索す。此に於て盛久遂に捕へられ鎌倉に下さる。梶原景時頼朝の旨を承けて心中の所願を尋れしに。何も答ふる事なかりしかば。急ぎ刑戮に處すべしとて土屋三郎宗遠に命じ首を刎れしめんとす。時に文治二年六月廿八日。盛

とも。衰へは老曾の杜を過るやみのをはり。あつたのうらの夕鹽の道をは波にかくされて。廻れは野邊にあるみかた又八橋やたかし山〳〵（上ロンキ地）「しほ見坂はしもとの濵名のはしを打とたり（シテ上）「旅衣かくきてみんと思ひきや。命なりけりさよの中山はこれかとよ（上地）「替る淵瀬の大井川。過行なみもうつの山（下シテ）「越ても關に清見かた。三穂の入海田子のうら打出て見れはそしろある。雪の富士のね箱根山。猶あけ行や星月夜はや鎌倉よ。着にけり〳〵（シテ詞）「夢中に道あつて塵埃を隔つ。けにやそこともしらさりし。山を越水を渡つて。此關東につきぬ。百年の榮花は塵中の夢。一寸の光陰は沙裏の金。實や故郷は雲井のよそ。千世もと契りし友ひとも。かはる世なれや我ひとり。鎌倉山の雲かすみ。實かゝる身

久由比濱の刑場に於て數度の上に座し。西に向ひて念佛十遍唱へ又南に向ひて二三十遍唱へし處を宗遠太刀振り上げて斬りたるに其太刀中より打ち折れたり。又富士の裾より光二筋きたりて盛久が身を照せり。あまりの不思議に驚きて

のならひかやかくてをからへ人に面をさらさんよりも。あつはれとうきられはやと思ひ候（ワキ詞）「荒痛はしや。何事やらん盛久の獨言を仰候。如何に申候。土屋が參じて候（シテ詞）「何土屋殿と候や此方へ御入候へ（ワキ）「心得申候（シテ）「扨最後はいつにて候そ（ワキ）「さん候御下向のよし披露申て候へは。盛久は大事の囚人にて候程よ。急き誅し申せとの御事にて候。此曉かしからすは。明夜かと仰出されて候。御最期の御用意あらふするにて候（シテ）「偖は拔群の遲速よて候。扨も此程土屋殿の御芳志。申も中々愚なり。またなからん跡一邊の御回向にも預らは。二世までの御芳志たるへし。我この年月清水の觀世音を信し。毎日御經懈ることなし。去をから今日は末讀誦申さす候。殊更今は寐期なれは。片時のいとまを給り候

宗遠このよしを頼朝に言上す。また頼朝の北方の夢に老僧來りて盛久の死罪は免させ給へと請ふことあり。汝は誰ぞと問へば京都清水の邊のものなりと答へて夢さめたりといふ。彼此おもひあはせて、佛の靈驗に感じ特に召返して其罪を

へ。彼御經をそと讀誦申度候「夫こそ有かたふ候。御心靜に御讀誦候へ。土屋も是にて聽聞申さうするにて候」「有難や大慈大悲は薩埵の悲願。定業亦能轉は菩薩の直道とか。や。ねがはくは無緣の慈悲をたれ。我を引導し給へ。今生の利益もしかけハ。後生善所をもたれか賴まん。二世の願望もし空くは。大聖の誓約豈虛妄にあらさらんや。惑遭王難苦臨刑欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞」「有難や此御經を聽聞申せは。御命も賴もしう社候へ」「實能御聽聞候物かな。此文といつは。たとひ人王難の災にあふと云とも。其劔段〻にをれ」「又衆怨悪退散といふ文は。いる矢も其身にたつまじけれは」「實たのもしや去なから。まつたく命の爲に此經を誦するにあらす。種〻諸悪趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸

免せりとふり。此事長門本平家物語に出づ。切の文句にいふ唐が原は相州片瀬の東をいへる地名にて夫木集の歌に。名にしおはゞ虎や伏すらん。東野にありといふなるもろこしの原。なごあるは是ふり。

悉令滅「此文の如くは。もろ〳〵の惡趣をも三惡道はのがるへしや有かたしとゆふ露の。命はをしゝ只後生こそはかなしけれ　上同「昔在靈山の。御名は法華一佛。今西方のあるしまた。娑婆示現し給ひて我らが爲の觀世音。三世の利益同しくは。かく刑戮にちかき身の。誓ひにいかてもるへきや。盛久か終の道よもくらからし賴もしや　シテ謡「荒ふしきや。すこし睡眠のうちよ。あらたなる靈夢を蒙りてゆ。荒有かたやゆ　ワキ上ツヨク「既に八聲の鳥おいて。御最期の時節只今なり。はや〳〵御出ゆへとよ　シテ謡「盛久も待まうけたる事なれは。左には金泥の御經。右には思ひの珠の緒の。命ぞ今を限りなれは。是そ此世を門出の庭よ。足よと〳〵と立いつる　ワキセル上「武士前後をかこみつゝ。是ぞ別の鳥の聲　シテ「鐘をき

こうる東雲に　ワキ「牢より牢の輿にのせ　シテ「由井の汀に
ワキ「急けり　上同「夢路を出る曙や。〳〵後の世の門出なるら
ん　ワキセル上「扨由井の汀に着しかは。座敷を定め敷皮しかせ
はや〳〵なほらせ給ふへし。シテ詞「盛久頓て座にあほり。清水
の方はそあたこと。西に向ひて觀音の。御名の唱へて待かけ
たり　太刀取「太刀取うしろに廻りつゝ。稱念の聲の下よりも。
太刀振あくれはこういかに。御經の光り眼にふさかり。取落
したる太刀をみれは。二にとれて段々となる。こはそも如何
なる事やらん　ワキ詞「盛久も思ひの外なれは。たゝ忙然とあ
きれゐたり　ワキセル「いやしく〳〵何をか疑ふへき。此程讀誦の御
經の文　シテ「臨刑欲壽終　ワキ「念彼觀音力　シテ「刀尋　二人「段
〳〵懷の經文あらたに曇りなきつるき段〳〵にをれにけり。末

世にてはなかりけり。荒有難の御經や。聽て此よし聞召。急き
御前に參れとの御使度〳〵に重れは。召にしたかひもり久は。
鎌倉殿に參りけり〳〵　ワキ詞「如何に盛久御前にて候。君此
曉ふしき成御夢靈の御告あり。盛久ももし夢やみけるとの
御事にて候　シテ詞「さん候御前にて申上うするにて候。しか
るに我此光陰を賴み。日夜朝暮に怠らす。彼御經を修讀せし
に。取わき此時節刑戮にちかき身を思つて。片時怠る事もな
く　下シテ「初夜より後夜の一點まて。肅然として座したりし
に　クセ「六窓いまた明さるに。耿然たる一天虛明なるうちに
思はすも。八旬にたけ給ひぬと見ゆさせ給ふ老僧の。香染の
袈裟をかけ水晶の數珠をつまくり。鳩の杖にすかりつゝ。妙
聞たゝしき御聲にて。我は陽洛東山。清水にあたりより汝か

爲に來りたり。本より大慈大悲の。誓願なとか空しからん。唯一音なりとても。我を念する時節の王難の災はのかるへし

シテ上「いはんや汝とし月多年のまとを抽むてゝ。發心人にこえたり。心易く思ふへし我汝が。命にかはるへしと宣ひて夢ハ即覺にけり。盛久貴く。思ひて歡喜の心限りなし

上ロンキ地「賴朝是をきとし召。此曉の御夢相も。同し告そとあらさなる御信感はかきりなし

シテ上「其時盛久は。夢の覺たる心ちして。感涙をとめかね御前をまかり立けれハ

上地「如何に盛久しいしとて。御簾をあけて召るれは

シテ「せむかたもなき盛久かいのちは千秋萬歲の春をいはふそと。御さかつきを下さるれハ

シテ上「種ハ千世そと菊のさけ

上地「花をうけたる。袂かな

ワキ詞「いかに盛久。もりひさは平家譜代の侍武

略の達者。其外乱舞堪能のよし君きこし召及はれたり。一とせ小松殿。北山茸狩遊路の御酒宴において。主馬のもりひさ一曲一撫の事。關東迄も隱なし。殊更是は悅の折なれハ。唯一さしとの御所望也いそいて仕り候へ

シテ詞「有難し〳〵。得がたきハ時去がたきは貴命なり。盛久かゝる時節に逢事。世以て類ひ有べからす。治りなひく時なれや。一天四海のうちのみか。人の國まて日の本の。もろこしか原も。此ところに酒宴なかはの春の興。〳〵。曇らぬ日影のとかにて君を祝ふ千秋のつるか岡の。松の葉のちり。失すして正木のかつら

シテ下「長居は恐れあり。なかゐはれそれありとまかり申つかまつり。退出しける盛久か。心のうちそゆゝしき〳〵

○經政は修理太夫經盛の嫡子にして皇后宮亮たり。壽永二年出陣せんとする時。侍五六騎ばかり召具して仁和寺御室の御所へ參り申しけるは。主上既に都を出させ給ひ。一門の運命今日既に盡きなんとす。經政八歳にして此御所

つねまさ

「是ハ仁和寺御室の御所に仕へ申す。大納言の僧都行慶にて候。扨も平家の一門但馬守經政は。いまた童形の時より。君御寵愛なのめならず候。然るに今度西海の合戰に討れ給ひて候。又青山と申御琵琶ハ。經政存生の時より預けくたされて候。彼御琵琶を佛前にすへ置。管絃講にて吊ひ申せとの御事にて候程に。役者を集め候　けにや一樹の陰にやとり。一河の流れを汲事も。皆これ他生の緣ぞかし。ましてや主上既に都を出させ給ひ。一門の運命今日既に盡きなんとす。經政八歳にして此御所に參り。十三歳にて元服仕り。大方御前を立ち去る事もなかりしに。今日より西海千里の波路に趣き候へば。又いつ歸るべしとも覺え候はず。今一度見參仕りたく候へども。甲冑をよろひ弓箭を帶したる身にて候へば憚ありとぞ申しける。此時

「風枯木を吹ハ晴天の雨。月平沙をてらせは夏の夜の。霜のおき居も安からて。假に見えつる草の陰露の身をから消かへる。妄執の緣こそはかなけれ　上同

「不思儀やなはや深更になる。まゝに。よるのともし火幽かなる。光りのうちより人影の。あるかなきかに見へ給ふは。いかに成人にてましますそ　上同

「我經政か幽靈なるか。御吊ひの有かたさに。これ迄あらはれ參りたり。

「そも經政の幽靈と答ふるかたとみむとすれは。又消ゝとかたちもなくて

「聲は幽に絶のこつて　上同

「正しく見へつる人かけの　上同

「有かと見れハ

「又みへもせて

「あるか

「なきかよ

「蜻蛉の　上同

「まぼろしの常なき身とて經まさの。〳〵。もとのうき世に歸り來て。それとい

御室には守覺法親王すませ給ひけるが。あはれに思召されし其恋にてもくるしからずと仰せられければ。やがて御前に出で。侍に持たせたる青山と云琵琶を取り出だして申すやう。名殘はつきず候へども。かゝる重寶を鄙の塵になさん事口惜

名のれとも其ぬしの。かたちは見えぬ妄執の。生をこそへたつれとも我は人をみるものを。實や吳竹の筧の水はかゆれとも。すみあかさりし宮のうちに。まほろしに參たり夢幻に參りたり　詞「不思儀やな經をさの幽靈かたちハ消聲ハ殘つて。猶も詞をかはすろや。よゝ夢なりとも現なりとも。法事の功力成就して。亡者に言葉をかはす事よ。荒不思儀の事やな　詞「我若年の昔より宮中に參り。世上に面をさらす事。偏に君の御恩德なり。中にも手向下さるゝ。青山の御琵琶。娑婆にての御ゆるされを蒙り。常は手馴し四の緒に　下同　今もひかるゝ心故。聞しに似たる撥音の。是ぞまさしく妙音の誓なるへし　上同　されはかのつねまさハ。いまた若年の昔より。外には仁義禮智信の。五常を守りつゝ。内にはまた花鳥

○つれまま

しく候へば。万一不思議に運命開けて都へ立ちかへる事も候はゞ。其時にこそ重れて申し受け奉らめと申す。宮ふかく哀れに思召して一首の歌を下されたり。

あかずして別るゝ君が名殘をば
後のかたみにつゝみてぞおく

經政。

風月詩歌管絃を專とし。春秋を松陰の草の露水の哀よの心にもるゝ花もなしゝ

「亡者の爲には何よりも。娑婆にて手なれし青山の琵琶。おの〳〵樂器を調へて。糸竹の手向を進むれハ」

「亡者も立より灯のかけに。人には見へぬ物なから。手向の琵琶をしらふれは」

「時しも頃は夜半樂ねふりをさます折節に」

「ふしきや晴たる空かき曇り俄に降くる雨のれと」

「しきりに草木を拂ひつゝ。時の調子もいかならむ」

「いや雨にてはなかりけり。あれ御覽せよ雲のはの」

上同

月にならひの岡の松の。葉風は吹落て。村雨の如くにれとつれたり。面白や折からなりけり。大絃はさう〳〵として。村雨のことし扱。小絃はせつ〳〵としてさゝめことにことをならす

第一第二の絃ハ。索〻として秋の

しく候へば。万一不思議に運命開けて都へ立ちかへる事も候はゞ。其時にこそ重れて申し受け奉らめと申す。宮ふかく哀れに思召して一首の歌を下されたり。

あかずして別るゝ君が名殘をば
後のかたみにつゝみてぞおく

經政。

風月詩歌管絃を專とし。春秋を松陰の草の露水の哀よの心にもるゝ花もなしゝ　「亡者の爲には何よりも。娑婆にて手なれし青山の琵琶。おの〳〵樂器を調へて。糸竹の手向を進むれハ」亡者も立より灯のかけに。人には見へぬ物なから。手向の琵琶をしらふれは　「時しも頃は夜半樂ねふりをさます折節に　「ふしきや晴たる空かき曇り俄に降くる雨のれと　「しきりに草木を拂ひつゝ。時の調子もいかならむ　「いや雨にてはなかりけり。あれ御覽せよ雲のはの　上同　月にならひの岡の松の。葉風は吹落て。村雨の如くにれとつれたり。面白や折からなりけり。大絃はさう〳〵として。村雨のことし扨。小絃はせつ〳〵としてさゝめことにことならす　第一　第二の絃ハ。索〻として秋の

○つれまさ

かせ。松をはらつて疎韻れつ。第三第四の絃は冷〻として夜の鶴の。子をおもつて籠の中になく。にはとりも心して夜遊のわかれとゝめよ

上シテ「一聲の風管い。秋秦嶺の雲をうこかせは。鳳凰も是にめて〻。梧竹に飛くたりて。翅をつらねて舞遊べは。律呂の聲〻に。心聲にはつす。聲あやをなす事も。むかしを返す舞のそて。衣笠山もちか〻りき。おもしろの夜遊やあら面白の夜遊や

上同 荒名殘をしの。夜遊やな

シテ詞「あら名こり惜の夜遊やな。適〻闇浮の夜遊にかへつて。心をのふる折ふしに

ツヨク また瞋恚の起る恨めしや

ワキセル さきにみえつる人影の。猶顯はるゝは經政か

シテ詞「荒魄かしや我姿。はや人ひとにみゆけるそや。あのともし火をけし給へとよ

下同 燈火をそむけて。〻。共にあはれむ深夜の月を

かくぞよまれけろ。

あはれなり老木若木に山ざくらおくれさきだち花はのこらじ

經政も。

旅ごろもよな〻袖をかたしきておもへば我ばとほく來にけり

さよみて別れしといふ。又育山の事は平家物語に。音仁明天皇の御宇嘉祥三年三月に播部頭貞敏渡唐の時。大唐の琵琶の博士廉承武に逢ひ。三曲を傳へて歸朝せしに。其時玄象獅子丸育山三面の琵琶を相傳して渡りけるが。龍神やをしみ給ひけん。波風荒く立ちければ。獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶をわたいて我朝の御寶とす。村上の聖代應和の頃ほひ。三五夜中の新月の色白くさゑ涼風颯々たりし夜半に。帝清涼殿にして玄象も。手にとるや帝釋しゆらの。たかひは火をちらして。瞋恚の猛火は雨となつて。身にかゝれは拂ふつるきは他をなやまし我と身をきる。こうは〻かへつて猛火となれは。身を燒苦患はつかしや。人には見えし物を。あのともし火をけさむとて。其身は愚人度の虫の火と消んと飛入て。嵐と共に燈を。嵐と共に。ともしひをふきけして暗紛れより。魄靈は失にけり

魄靈の影は失にけり

○つれまさ

をぞ遊ばされける。時に影の如くなる者御前に參じて優に氣高き聲を以て唱歌をめでたう仕る。帝暫く御琵琶をさしおかせ給ひて。抑汝は如何なる者ぞ。何處より來れるぞと仰せければ。答へ申していはく。是は昔貞敏に三曲を傳へ候ひし大唐の琵琶の博士廉承武と申す者にて候ふが。三曲の中に秘曲を一曲殘せる罪によりて冥道に沈淪仕る。今君の御撥音妙に聞え侍る間參入仕る所なり。願くは此曲を君に授け參らせて。佛果菩提を生ずべき由申して。御前に立てられたりげる青山を取り。轉手をれちて此曲を君に承け奉る。三曲の中に上玄石上これなり。其の後は君も臣も恐れさせ給ひて遊ばし彈く事もさせ給はざりしを。仁和寺の御室の御所へ參らさせ給ひたりしと。此の經政最愛の童形たるに因りて下し給はられたりけるとかや。甲は紫藤の甲。夏山の峰のみどりの木の間より有明の月の出でけるを撥面にかくれたりける故にこそ。青山とは名づけまれ。玄象にも相劣らぬ希代の名物なり。經政は幼少の時より。詩歌管絃の道に長じ給へる人なりしかば。かくるさわがしき中にも心をすまし。ある朝竹生嶋へ參られけり。政經明神の御前にて諸に法施參らせて居給へば。やがて日暮れ十八日の月さしのぼりて。海上も照りわたり御社も輝きて誠に面白かりしかば。住僧琵琶をもち出でたり。經政之を取りて彈き給ふに。上玄石上の秘曲には宮中も澄みわたるばかりなりければ明神も感應し給ひけん。白龍現じて見え給へり。經政あまりのかたじけなさに琵琶をおき給ひて。

千早振神にいのりのかおへばやしろくも色のあらはれにけり

怨敵を平げ。凶徒を退くる事疑ひなしとてよろこび勇みて竹生嶋を出でけるとぞ。と見えたり。

○大原御幸

建禮門院名は德子。平相國清盛の女にして高倉天皇の中宮。安德天皇の母なり。壇の浦の軍に平家大敗して今を限と見えしかば。門院の御母二位の尼は泣く〳〵安德天皇をいだき奉り

大原御幸

大臣詞「是は後白河院に仕へ奉る臣下也。扨も此度先帝二位殿をはしめ奉り。平家の一門長門國はやとものの浦にして。悉果給ひて候。女院も御身を投させ給ひ候と取上奉り。かひなき御命助かりおはしまし候。三河守範頼。九郎大夫の判官義經兄弟供奉し申。三種の神寶事ゆゑなく都へ納り給ひ候。去程に女院は都にうつらせ給ふべかりしを。先帝安德天皇の御菩提。幷に二位殿の御跡御弔ひの爲に。大原の寂光院に浮世を厭ひ御座なされ候を。法皇御幸をなされ。御訪ひ有へきとの勅諚にて候間。御幸の山路をも申付ばやと存候。いかに誰

て絃に立ちいでしに。君は功き御心にもあきれ給へる御有様にて。我をばいづちへ具してゆくぞと仰せられければ。尼は涙を流して申すやう。君いまだ去るしめさずや。萬乗の御主とは生れさせ給へども。悪縁にひかれて御運すでに盡きさせ給ひぬ。此國は心憂き境にて候。あの波の底にこそ極楽浄土と申してめでたき都の候間。それへ伴ひまゐらするぞ。りと慰めまゐらせて。遂に海に沈みはてぬ。其時建禮門院もつゞいて飛び入り給ひしを。源氏の武士に助けられ都に送られ給ひ

○大原御幸

か有。大原へ御幸有へきなれは。行幸の道をも作り其清めを仕候へ　サシ女院「山さとは物のさびしき事社あれ。世のうきよりはあか〳〵に。住よかりける柴の扉。都の方の音信は。まとはにゆへるませ垣やうきふし茂き竹ばしら。立居につけて物思へと。人目なきこそ安かりけれ　下同折〳〵こゝろなけれと問物い　上同しつの妻木か斧のねと。〳〵。梢の嵐猿のこゑ。これらの音ならては。正木のかづら青つゝらくる人稀に成はてゝ。草顔淵がちまたに。しけき思ひの行へとて。雨原憲か樞ともうるはふ袖の涙かな〳〵　女院詞「如何に大納言の局上の山に上り樒と摘候へし　肩詞「童も御供申。妻木わらひを折供御にそなへ申候へし　女院サシ「たとへは便なき事なれ共。悉達太子い浄梵王の都を出。檀特山のさかしき道を凌き。菜

○大原御幸

摘水汲薪　同「とり〳〵樣〳〵難行し仙人に仕へさせ給ひて。終に成道なるとかや。我も佛の爲なれい。御花筐とり〳〵猶山深く入給ふ〳〵　一セイ「九重の花の名殘を尋ねてや。青葉をあたふ山路かな　次第分ゆく露もふか見草。〳〵。おはらに御幸いろかむ　詞「行幸をはやめ申候間。大原に入御候　ワキ上カヽルツヨク

かくて大原は御幸なつて。寂光院の有樣を見渡せは。露むすふ庭の夏草しけりあひて。青柳糸を亂しつゝ。池の浮くさ波ゆられて。錦をさらすかと疑はる。岸の山吹さき乱れ。八重たつ雲の絶間より。山時鳥のひとこゑも。君の御幸を。待かほなり　法皇下「法皇池の汀を叡覧有て。池水に。汀の櫻ちり敷て。涙の花社。盛なりけれ　同ふりにける岩のひまより落くる。〳〵。水の音さへよし有て。緑羅の垣翠黛の山。繪にかく共。筆よ

した。安德天皇の御菩提かつは御母の御跡なも弔らはゞやとて東山の麓吉田の邊ある所に立ち入らせ給ひぬ。かくて文治元年五月御年二十九にて御髮をおろし給ひ。なほ此御住居も都ちかく思召されしかば。遠に大原山の奥。寂光院といふ

もれよひかたし。一宇の御堂あり。いらか破れては霧不斷の香を燒。扉おちては月もまた常住の灯をかゝくとはかゝる所かものすこや〳〵

ワキ詞「是成こそ女院の御菴室にてありけに候。

軒ちは蔦あさかは這かゝり。藜蓼ふかくとさせり。荒物すこの氣色やな。

詞 如何に此菴室の内へ案内申候

内侍詞「誰にて渡り候そ

ワキ 是い万里小路の中納言にて候

内侍「夫は扨人目まれなる山中へは。何とて御ゝたり候そ

ワキ「さん候女院の御住居御訪ひの爲に。法皇是迄御幸にて候

内侍「女院は上の山へ花摘ゝ御出にて。今は御留守にて候

ワキ「御幸の由申て候へは。女院は上の山へ花つみに御出ゝて。今は御留守れよし申候。暫此所ゝ御座をなされ。御歸そ御待あらふするゝて候

法皇「やあ如何ゝあのあまさ。

寺にうつり給ふ。鹿の音かすかに音づれて。虫の聲もたえ〳〵ふるに。さまゝ〳〵とりあつめたる御心細きたとへやるべき方もなし。或日人の足音せしかば。女院かくれ給はんとて誰が來りしぞと見せ給ひしに。鹿の通るにてありしかば。大納言

汝はいか成者ぞ

内侍「實々御見忘れは御理り。是は信西が娘。あはの内侍がなれる果にて侍ふ。かく淺ましき姿おかから。明日をも知らぬ此身なれは。恨とは更に思はすさむらふ

法皇詞「女院は何くゝ御渡り候そ

内侍「女院は上の山へ花摘に御出にて候

法皇「扨御供ゝは

内侍「大納言の局今少待せおはしましさむらへ。やかて御歸にて候へし

サシ女院「昨日も過けふも空しく暮なんとす。あすをもしらぬ此身ながら。唯先帝の御面影。忘るゝ隙はよもあらし。極重惡人無佗方便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位殿一門の人〳〵成等正覺。南無阿彌陀佛。

詞 や。菴室のあたりに人音の聞ゝ候

内侍「只今こそあのそゝ傳ひを女院の御歸にて侍ふ

法皇「扨何れか女院。大納言の局はいつれぞ

の佐の局として御そばに仕ふる女房涙をなさへて。

岩根ふみたれかはさはん檜の葉のそよぐは鹿のわたるふりけりとよみたる事もありき。時に文治二年の春後白河法皇此女院の御住居をゆかしく思召して。御幸ありしに池の汀と御覧ありて。

○大原御幸

内侍上「花かたみ心ちにかけさせ給ふは。女院にてわたらせ給ふ。妻木にわらひをりそへたるゝ。大納言のつぼねなり。いかに法皇の御幸にて候

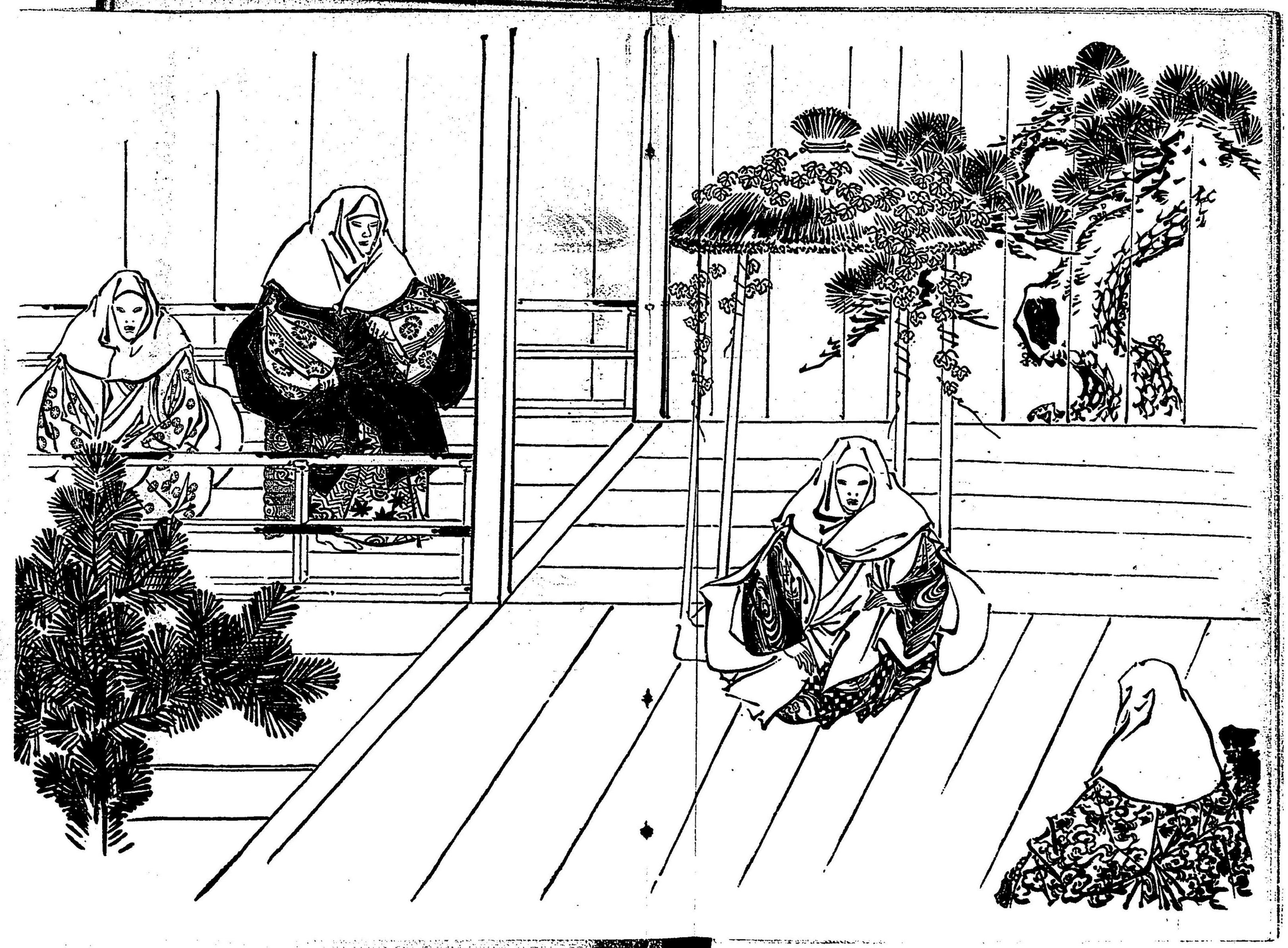
上女院「中〳〵になほ忘執の閻浮の世を。忌れもやらで浮名をまた漏せいもる〳〵涙の色。袖のけしきもつゝましや

下同「とは思へ共法の人同じ道にと頼むなり

上同「一念の窓の前。〳〵に。攝取の光明を期しつゝ。十念の柴の扉よは。聖衆の來迎を待つるに。思はさりけるけふの暮いにしへに歸るかと猶思ひ出のなみたかな。實や君こゝに叡慮の惠み末かけて。哀もさそな大原や。せれうの里の細道おほろの清水月あらて。御影や今に殘るらむ

上土地「扨や御幸の折しもはいかなる時節なるらん

上女院「春過夏もはや。北祭の折あれは。あを葉にましる夏木立春の名殘そをしまる〳〵



池水にみぎはの櫻散りしきて波の花こそさかりなりけれ

と遊ばされけり。後は山。前は野邊にて。猿の聲斧の音あらではとふ者もなき所のさまなり。やがて人を召したるに老い衰へたる尼一人御前に參る。女院はいづくにゐと仰せられければ。

地上「遠山にかゝるしら雲は　女「散にし花のかたみかや　地上「夏草のしけ見か原のそことなく分入給ふ道の末　下女「こゝとてや。〳〵。實寂光のしつかなる。光りの影をこしめたゝ

上同「光りの影も明らけき。玉松かゆに咲そふや　女「池の藤浪夏懸て　地「是も御幸を　女「待かほに青葉かくれのおそ櫻はつ花よりもめつらかよ。中〳〵やう替る有樣を哀と。叡慮にかけまくも。かたしけなしや此御幸柴の扉のしゝしか程も有へき住居成べしや〳〵　下女院「思はすも深山の奥の住居して。雲ゐの月を余所に見むとは。加樣に思ひ出しに。此山里迄の御幸。かへす〳〵も有難うこそ候へ　法詞「近曾或人の申せしは。女院は六道の有樣まさに御覽しけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきよ不審に社候へ　女院詞「勅定は去御

此上の山へ花つみに入らせ給ひぬと申す。きれば佛につかへ給ふ御身とい申しおがら。さやうの事に仕へ奉る人もなきにやさまづ御袖なぬらし給ふ。此尼は入道信西が女阿波の内侍といひしものなりけり。かくて法皇は女院の庵室に入ら

事なれ共。倩我身を案しみるに　夫身を觀すれは岸の額に根を離れたる草。命を論ずれハ。江のほとりにつなかさる舟　されは天上のたのしみも。身にしら露の玉かつら。おからへ果ぬ年月も。終は五衰のねとろへの　下女「消もやら れぬいのちの中に　下同　六道のちまたに。迷ひしおり　まつ一門西海の涙にうきしつみ。よるへも知れぬ舟のうち。海に臨めとも。うしはなれは飲水せす。餓鬼道のそくなり。又ある時は。汀の涙の荒磯に。打かへすかの心地して船こそり つ〻。泣さけふ。聲は叫喊の罪人もかくや淺ましや　上女院「陸の詩ひ有時は。是そ殊に目の前の。修羅道の戰ひあらおそろしや數〻の。駒の蹄の音きけは。畜生道の有樣を。見聞もおなし人道の。苦しみとなりはつるうき身の果ぞ悲しき　法皇詞「誠

せ給ひて御覽あるに。御障子に諸經の要文ども色紙にかきて所々にはられたり。其中に女院の御歌されぼしくて。

思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよろに見んとは

さあり。傍は御寢所にて竹の竿に麻の御衣紙の衾などかけられたり。法

ゝ有難き事共かな。先帝の御最期の有樣。何とか渡り候ひつる御物語候へ　女院「其時の有樣申につけてうらめしや。長門國いやとも。とやらんにて。筑紫へひとまづ落行べきと一門申しあひしに。をがたの三郎か心替りせし程よ。薩摩かたへやおとさんと申しし折節。上り塩にさへられ。今はかうよとみゆしに。能登守教經ゝ。安藝の太郎兄弟を左右の脇ゝ狹み。最期の供せよとて海中ゝ飛で入。新中納言知盛は。沖なる船の碇を引上。かふと〻やらんゝ戴き。乳母子の家長か。弓とゆみとを取かはし。其儘海に入にけり。其時二位殿鈍色の二つきぬに。練はかまのそゝ高く狹んて。我身ゝ女人なり迚も。敵の手にはとたるまし。主上の御供申さんと。安德天皇の御手を取船はたに臨む。何處へ行ぞと勅諚有りしに。此國と申す

皇御涙をながし給へば。御供の公卿も昔の事思ひいでゝ皆袂をぞぬらしける。しばらくして女院山より御歸りあり て御對面あり。互に御涙せきあへずして。昔の御物語に時をぞうつさせ給ふ。さるほどに日もいやゝ暮れかゝりければ。御名殘つ

○大原御幸

に逆臣多く。かくあさましき所也。極樂世界と申て。めてたき所のあの波の下にさむらふなれは。御幸なし奉らんと。泣〳〵奏し給へは。扨い意得たりとて。東に向はせ給ひ。天照太神に御いとま申させ給ひてまた　下同　十念の御ために西に向はせはしまし　女院「今ぞしる。上同　御裳裾川の流れには。浪の底にも都ありそはと。是を最期の御製にて。千尋のそこにいり給ふみつからも。續いて沈しを。源氏の武士取あけてかひなき命なからへ。ふたゝひ龍顏にあひ奉り。不覺の涙ゝ袖をしぼるゝ恥かしき。いつまても御名殘は如何で盡ぬべき。早還幸とすゝむれは。〳〵。おこしをはやめはる〳〵と。寂光院を出給へは　女院上「女院は柴の戸に、同　しはしか程は見送らせ給ひて御菴室に入たまふ〳〵

きせされども。御涙をおさへて還幸あり。女院も御別ををしみ給ひつゝ。御後の見えずなるまで見送らせ給ひけりとぞ。これ平家物語源平盛衰記ゝ記せるところにて此謠曲に作れる大意なり。

○弱法師

河内の國高安の里なる左衛門尉通俊といふ人の子を俊徳丸といふ。あるものゝ讒言によりて家を追はれ。悲しみのあまり途に盲目の身となりさまよひあるきつゝ食を乞ひて月日を

○弱法師

弱法師

ワキ詞「加樣に候者は。河内の國高安の里に。左衛門尉通俊と申者にて候。扨も某子を一人持て候を。去人の讒言より。暮に追失ひて候。餘りに不便に候程に。天王寺にて一七日施行を引候。今日も申付施行をひゝせゐやと存候　一セイシテヨワク「出入の。月をみされは明暮の。よるのさかひを。いそしらぬ　夫鴛鴦の衾の下には。たちさる思ひを悲しみ。比目の枕の上には波をへたつる愁あり。況や心有かはなる。人間有爲の身と成て。憂とし月の流れては。妹背の山の中ゝ落る。吉野の川のよし

送りぬたりしが。ある日攝津の天王寺に來りて。たま〳〵其父通俊の。俊鑑丸が爲めに施行を引きに來りしに出逢ひ。父につれられて目出度く故郷に歸れることを作りたり。

此天王寺といふは。攝津の國東生郡にありて聖德太子の御草創の寺なり。攝津名所圖會にいふ。太子御眞蹟本願緣記に曰く。金堂に救世觀音像を安置す。百濟の國の王我入滅の後。懇慕渴仰して造る所の像なりと云々。かくいふことは。太子の前身は百濟の國の聖明王にて如意輪の化身なり。其子威德

やよしとも思ひのはてぬこゝろゝな。淺ましや前の世よ誰をか厭ひけん。今又人の讒言により。不孝の罪にしつむもる。思ひのなみたかき曇り。盲目とさへ成果て。生をも替ぬ此世より。中有のやみにまよふかり　下同元來もこゝろの闇はありぬへし　上傳へ聞彼一行の火羅の旅。〳〵。闇穴道のちまたにも。九曜の曼荼羅の光明かくやくとして行末を照し給ひけるとかや。今も末世といひながら。さすか名におゝ此寺の。佛法最初の天王寺の石の鳥居爰なれや。立よりて參らんいさ立よりて參らむ　ワキ詞

長閑なる。日を得てあまねき貴賤の場に。施行をおしてすゝむれは　シテ詞「實有難き御利益。法界無緣の大慈悲かと。踵を繼て群集する　ワキ詞「是に出たる乞丐人は。いかさま例のよ

ろほしな　シテ「うたてやな又我等に名を付て。みな弱法師との給ふそや。　カール上ゲニ實も此身は盲目の。足弱車のかたはなから。よろめきありけはよろほしと。名付給ふはことわりや　ワキ詞「實いひすつる言の葉迄も。情有けに聞ゆるそや。先々施行を受候へ　シテ詞「うけ參らせ候はんや。花の香の聞は候。いゝ樣此花ちりかたになり候な　ワキ「あゝ是なる籬の梅の花か。弱法師か袖に散かゝるそとよ　シテ「うたてやな難波津の春あらは。唯このはなところ仰有へきに。　上今は春邊もなかはそかし。梅花を折て頭にさしはさまされとも。二月の雪は衣にたつ。荒れもしろの花の匂ひやな　ワキ上セル「實此花をそてにうくれは。花もさなから施行そとよ　シテ詞「中〳〵の事草木國土悉皆御法も施行なれは　ワキセル「皆成佛の大慈悲よ

王父の王崩じ給ふと深く歎かせ給ひ此尊像を作り御在位の如く孝養せさせ給ふ。我朝に聖德王出誕さあるを傳へきゝて。百濟の國よりわたさるゝなりと。又天王寺の南大門の外に東へ通る細道あり。これは俊德丸河内の國高安より天王寺

○嗣法師

シテ「もれしと施行につらなりて　ワキ「手を合せ　シテ「袖とひろけて　上同　花をさへうくる施行の色〳〵に。〳〵。匂ひきにけり梅のはなの。春なれや。おにはの事か法ならぬ。遊ひ戯れ舞うたふ。誓ひの網にはもるゝまじき。難波の海を頼もしき。實や盲龜の我等まて。みるこゝちする梅かえの。花の春の長閑さは難波の法によもゝれしゝ　クリ地ソレブツニテナイオン夫佛日西天の雲に隱れ。慈尊の出世またはるか。三會の曉いまたなり　サシシテ「然るに此中間にれいて。何と心をのはめまし。是によつて上宮太子。國家を改め万民を教へ。佛法流布の世と成て遍く惠を弘め給ふ　シテ「其後當寺を御建立あつて　同　始て僧尼の姿を影はし。四天王寺と。名付給ふ　金堂の御本尊は。如意輪の佛像救世觀音とも申すと。太子の御前生。震旦國の思禪師にて。渡

へ参詣したる道ふりとて後世街道といふなりと見ゆ。

らせ給ふ故。出離の佛像に應しつゝ。今日域に至る迄。佛法最初の御本尊と。顯れ給ふ御威光の。誠かるかなや末世相應の御誓ひ。しかるに。當寺の佛閣の。御作りの品々も赤稱檀の靈木にて。塔婆の金寶に至る迄。閻浮檀金なるとかや

上ノ「萬代」にすめる龜井の水まても。水上清き西天の。無熱池の池水をうけつきて流れ久しき世々迄も。五濁の人間を道引て。濟度の舟ともよするなる難波の寺の鐘の聲。こと浦〳〵にひゞき來て。あまねき誓ひみち鹽の。たしてるうみ山も。皆成佛の姿あり

ワキ詞「是成者をいかなる者ぞと思ひて候へは。某か追失ひし子にて候はいかに。思ひの餘りは盲目と成て候。荒不便とおとろへて候ものかな。人目もさすかは候へは。夜に入て某と名乘。高安へつれて歸らはやと存候。やあ如何に

日想觀を拜み給へ　「實々日想觀の時節なるへし。盲目なれはそなたとはかり。心あてなる日に向つて。東門と拜み南無あをた佛　「や。東門とはいはれなや。爰は西門石の鳥居よ　「荒れろかや天王寺の。西門と出て極樂の。東門にむかふは僻事か　「實々嘸と難波の寺の。西門を出る石の鳥居　「阿字門に入て　「阿字門を出る　「阿彌陀の御國も　「極樂の　「東門に。向ふ難波の西の海　「入日の影も。まふとかや　「荒面白や我盲目とならさりしさきは。常にみなれし境界なれは。何うたかひも難波白の。江月照し松風吹。永夜の清宵何のなり所そや。住吉の。松の隙より。詠むれは　「月落かゝる。淡路嶋山と　「詠しは月影の。〳〵。今は入日やたちかゝるらむ。日想觀なれは

曇りも波。淡路繪島須磨あかし。紀の海まても。みはたり〳〵滿目青山は心よあり　「あふ。見るそよと〳〵　「扨難波の浦の。致景の數〳〵　「南はさこそとゆふ波の住吉の松陰　「ひかしの方は時を得て　「春の緑の草香山　「北はいつく　「難波なる　長柄の橋のいたつらにかなたこなたとありくほとに。盲目のかなしさは。貫賤の人に行あひの。まろびたゝよひ難波江の。足もとはよろ〳〵と。實も誠のよろほしとて。人は笑ひた　まふそや。思へは恥かしや　今はは　な今は狂ひ候まし　いまよりは更に狂はし　夜も更ひとも　しつまりぬ。いかなる人の果やらん其名を名乘給へや　「思ひよらすや誰なれは。我いにしへと問たまふ。高安のさとなりし俊德丸かはてなり　「扨は嬉しや

是こそハ父高安の通俊よ　地「そも通俊は我父の其御聲と聞よりも　地「むね打さゝきあきれつゝ　地「こハゆめかと　地「俊徳は　地親なからはつかしとてあらぬ方へ逃もけハ。ちゝは追付手をとりて。何をかつゝむ難波寺の鐘の聲も夜ふきれに明ぬさきにとんさなひ。あけぬさきにといさなひたか安の里に歸りけり〳〵

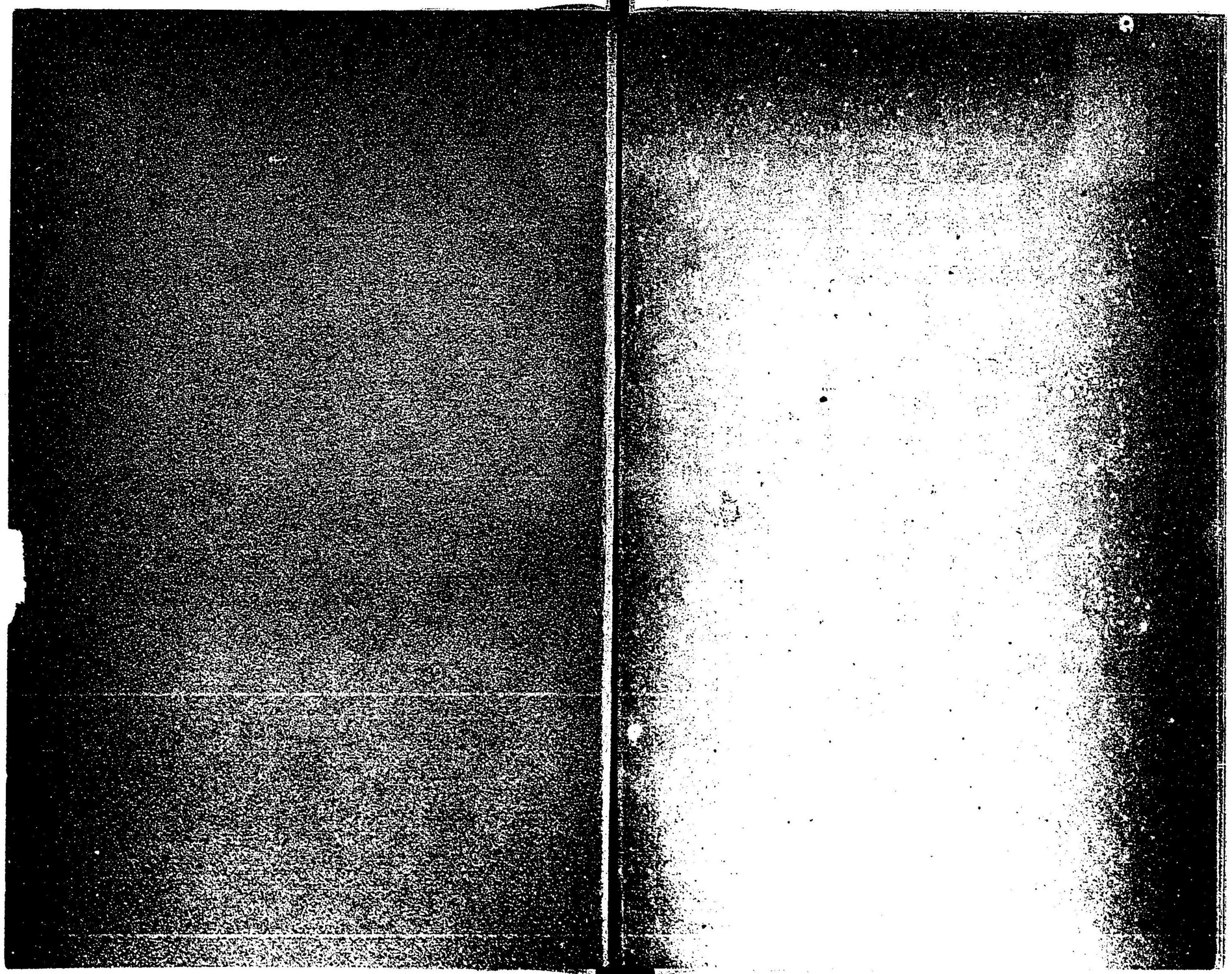
謡曲訓蒙圖會第三終

明治廿九年六月十二日印刷
明治廿九年六月十五日發行

定價金三拾五錢

編纂者　東京神田區裏猿樂町九番地　矢田正義
發行者　東京日本橋區通四丁目十番地　江島伊兵衛
印刷者　東京々橋區弓町十三番地　松本義弘
取次所　京橋區尾張町　東海堂
同　鎗屋町北國組　巖々堂
神田區神保町　東京堂

版權所有



21
261

21
261